日本放送作家協会賞

第14回

■ 1974年7月31日
■ 於国立教育会館

付/第2回ラジオドラマ
入選者発表

日本放送作家協会

昭和四九年度　第十四回　受賞者一覧

優秀番組賞　「それぞれの秋」（木下恵介プロダクション制作　東京放送放映）
「けったいな人々」（日本放送協会）
「新八犬伝」（日本放送協会）
「つくし誰の子」（日本テレビ）
「五木寛之シリーズ」（文化放送）
「天皇の世紀」（朝日放送）
「スポットライト」（日本放送協会）
「海外取材番組・文明と食生活」（日本放送協会）
「ヤング・おー！・おー！」（毎日放送）

演出者賞　井下靖央（東京放送）〃それぞれの秋〃等の演出

演技者賞　高橋英樹（〃ぶらり新兵衛〃〃国盗り物語〃など）
高森和子（〃けったいな人々〃など）

大衆芸能賞
＜演芸部門＞　月の家円鏡（午後二時の男）
＜ショー部門＞　愛川欽也（ディスクジョッキー）

CM作品賞　ミノルタSR・Tスーパー（愛川欽也・研ナオコ）ミノルタカメラ株式会社

優秀番組賞の選考に当って

久板栄二郎

昨年度までは、ドラマ部門と非ドラマ部門から各々一本ずつ、という含みでの選考でしたが、一本にしぼることの難しさを、選考のたびに痛感しました。何分にも、年々番組が多様化して、色合を異にしながら優秀さに甲乙をつけかねる作品が、幾つか並ぶ結果になったからです。

で、今年度からは、一部門宛て五本見当ということに改め、慎重な検討を通じて、左記九作が選ばれたのであります。

優秀番組賞

『それぞれの秋』の完成度

田井洋子

平凡な家庭生活の中に、ヒューマンな目で夫々の人間の弱さや誠実さを捉え、魅力的なナレーションによって表現した手法は、ユニークさの中に奇をてらわず、脚本、演出、演技すべてに亘って一分の隙もなく、芸術性、社会社を渾然融和させた完成度は本格的テレビドラマとして堂々たる貫禄を示しています。

と同時に、一貫して自信ある制作態度——それこそ現在最も求められているものではないでしょうか。息の長い「木下恵介劇場」のお仕事に心からの拍手を送ります。

『けったいな人々』

寺島アキ子

「けったいな人々」には、生きた人間が登場しました。それが新鮮な驚きを与えてくれました。

脚本が人間を適確に描き出し、俳優諸氏が実にいきいきとそれらの人間を演じていました。端役の人々まで、生活の匂いをちゃんと感じさせてくれたのです。

考えてみれば、それは、ドラマであれば当然のことなのに、その当然なことができているテレビ・ドラマがほとんど無いのだなア、ということをつくづく考えさせられました。

『八犬伝』の『新』発見

阪田寛夫

「新八犬伝」の面白さを一言でいうのは私にはむずかしい。

太棹のひびきがいい。折紙みたいな人形の衣裳がいい。段違いの目がいい。坂本九の「語り」がいい。一度見ただけでも面白いが、続けて見たくなる得体の知れなさがいい。とにかくこれだけ凝縮した面白いものを、普通のドラマで三百回も続けるとしたら、どんな死物狂いの苦労が要るか考えてみればよい。テレビという西洋器械之術が、「日本ミュージカル」の長所を再発見したわけだ。

チームワークの良さ
『つくし誰の子』

上野一雄

こちらが齢いさまになったせいか、安易に作られたもの、ウソを平気で押し通すもの、そういう作品を嫌う気持ちが、段々ドラマ嫌いになったなかで、珍らしく、わたしの心にひびく作品があった。それがNTVの「つくし誰の子」で、シリーズ物だから全部を見たわけではないが、見た限りでは感動し、又、見ようという気になった。楠田さんの作品の良さと、池内さんの好演と相俟って、チームワークの良さ、をしみじみ感じさせる良い仕事だったと、喜んで推した次第である。

新しいラジオ・ドラマの感動
『五木寛之シリーズ』

水原明人

昨年来、ラジオ・ドラマの復活という言葉をしばしば耳にするようになり、事実、各局で、連続ラジオ・ドラマの登場が目につきはじめた。その中で、文化放送の『五木寛之シリーズ』は特にきわだっていたように思う。

昔ながらのドラマのスタイルにこだわらず、音楽の扱い方も新鮮で、今までドラマになじまなかったヤング層にも、新しいラジオ・ドラマの感動をよびさました。その質の高さを評価したい。担当者諸氏よ、さらに前進を！

『天皇の世紀』

桂一郎

この原作は以前にもドラマ化されたが、その時には受賞の対象とならなかった。大仏先生の書かれた原作の重量感にドラマが敗北したという形だった。しかし今回はドキュメンタリーとして処理され伊丹十三の起用も的を射て、アンケートでも、選考委員会でも圧倒的な支持があり今回の受賞となった。

ともあれ、先生が「僕も卒業論文を書き始めたよ。」といわれた言葉が心に残っている。

『スポットライト』にスポットを！

松本重美

当今、衝撃的（？）な素材を、なんの芸もなくただ羅列しただけのショーが多すぎる。その中で、時には平凡とさえ思われる素材に時間をかけ衆智を集めて、みごとにショーアップしてみせる「スポットライト」は、スタッフの頑固なほどのプロ意識を感じさせてくれる番組である。

放送作家協会賞は、僕ら放送作家というプロが、おなじ放送の世界にたずさわるプロのすぐれた仕事を讃えて贈る賞である。

数あるテレビショーの中から、僕らは特に「スポットライト」にスポットをあてた。当然である。

新鮮だった海外取材番組
『文明と食生活』

村田修子

海外の各国で取材し、「フランス料理の伝統」「チーズの風土」「肉食と名所」「香料の島」「お菓子のくらし」「地中海の幸」と六回にわたって〝文明と食生活〟シリーズで放送されたものであるが、一つのテーマをもって構成編集されたことで、ドキュメンタリー番組に、深厚な味と新鮮な魅力を加味した。〝文明と食生活〟についての、いろいろな発見と、知ること、感じることの充足、それは殆んど、感動に近いものであった。

『ヤング・おー！おー！』

かのうあらた

大観衆が絶叫するオープニング。

司会者とタレントだけが、ステージの上でふざけ合うショー番組と異なり、「会場の観客」と「茶の間の視聴者」とを最優先に番組参加させ、楽しませようとする、大阪独特のサービス精神に貫かれた姿勢。それが数々の新しい演出・新しいカメラワーク・新しい特設ステージ・新しい照明操作……そして、新しい観客マナーと、新しい関西の新進演芸タレントを、ここ数年間、続々と生み出したのです。その功績は、高く評価されるべきです。

演出者賞

井下靖央氏を推す

山田太一

単なる技術者ではなく、独自の詩とスタイルを持っている演出家はきわめて少ない。

井下氏は、その稀少なひとりであり、とりわけ、抑制のきいた映像感覚、ありふれたもの微妙なもの曖昧なものに対する認識の深さ、ユーモア、風俗描写の節度等々によって、一九七三年、余人を許さぬ存在を鮮やかにしたと思います。

放送作家にとっては大切な人であり、時には鉛を金にかえてくれることをも願って、大推薦いたします。

演技者賞

高橋英樹の成長と飛躍

大野靖子

俳優の成長や、演技の飛躍の一瞬を見る事は、作者の楽しみでもあります。

「国盗り物語」の織田信長のシャープでシリアスな演技、「ぶらり新兵エ」の大らかで軽妙な演技…この対象的な演技の展開を鮮やかに見せた英樹さんの成長ぶりを、新鮮な驚ろきと喜びで見ておりました。

結婚されて、人間的にも俳優としても華麗な開花期を迎えられた英樹さんの将来を考える時、「これからは屈折の多い、辛抱役に挑みたい…」ともらされた、その聡明さと意欲に拍手を送り、新らたなる期待と興味をわかせております。

〃楽しい人〃。高森和子

岡本克巳

高森さんの日常のおしゃべりを聞いていると、なんともいえず楽しい。描写が適確で、それが大阪弁のニュアンスを伴って、情景の濃淡まで彷彿としてくる。「けったいな人々」での演技も楽しかったが、そんな普段の高森さんを見ていると、今度の受賞が、女優として行きついたところにあった演技賞でなく、もっと先の楽しみな人だと言う気がしている。この先また何度も賞を取ってほしい人である。

大衆芸能賞

月の家円鏡への評価

小島貞二

演芸部門は大阪の桂三枝、京唄子・鳳啓助それに浪曲の玉川勝太郎らが円鏡と票をきそった。決して円鏡の独走でなかった点に今年の特色がある。

円鏡への評価は「午後二時の男」（文化）に代表されるあのサービス精神と庶民性にある。落語家というワクの中ギリギリの線でいい仕事をしている。この賞のねらいは本来は高座芸にある。本芸の〃落語〃にもう一つの飛躍を示してほしいという願いもこめて、推した理由とする。

愛川欽也のフィーリング

奥山侊伸

愛川欽也、集団疎開を経験しているくせに、妙に若い、みてくれではなく気持がである。フィーリングの若さは抜群、あの縮れッ毛も天然パーマだと云うから全身が現代向きに出来ているのだろう。そのくせ「ねえママ、パンタロンのオジさんもう出掛けた？」と中学生の息子の声にベッドで寝たふりをしてた。……大きな息子がいる。パリをみて「ナポレオンの遺産で喰ってるナ」と感心する発想のユニークさも持っている。大衆芸能賞……実にピッタリ！

ＣＭ作品賞

すぐれた素材把握

『ミノルタＳＲＴスーパー』

遠　藤　　淳

愛川欽也、研ナオコというあくの強いキャラクターを短い秒数の中に、絶妙なまでに生かし切った製作陣のすぐれた素材把握がまず評価された。
そしてカメラを使う人間の心理をユーモアの中で適確に表現した巧みさが買われた。
〃男は美人を撮りたい、女は美人に撮ってもらいたい〃この素朴な願望は永遠の心情なのだから…。それにもうひとつ。――商品を観客的にとらえる姿勢。
ともかくミノルタCFの製作スタッフの皆さん、おめでとう！

日本放送作家協会主催・NHK後援による昭和四十八年度ラジオドラマ公募は、応募作一五二篇の中から厳選の結果、左記のとおり決定した。なお入選作品は、四十九年二月二十二日、「FM芸術劇場」として放送された。

第二回懸賞ラジオドラマ発表

入選　渡辺智子「ネーミング」
佳作　新井敬二「バビ、濠は深くしろ」
佳作　木村将平「四〇〇八年への贈物」